

# 言語文化学科

ドイツ語 フランス語圏  
言語文化コース  
ドイツ語圏言語文化領域

## ドイツ語圏言語文化領域

とは

このコースは、語学、文学、文化を3つの柱としています。3名の教員の研究対象は、ドイツ語学、ドイツ語圏（ドイツ、オーストリア、スイスほか）の文学、ドイツ語圏の文化です。語学概論、文学史、文化論といった講義科目の他に、ドイツ語を読むテキスト講読の授業があります。ネイティブによる会話のクラスでは実践的な会話を身につけることができます。ドイツ語圏の世界に存分に浸ることができるでしょう。ドイツ語圏への留学を考えている人には短期、長期にかかわらず様々な情報を提供しています。独文は少数数のコースです。自分のペースで考え、行動したい人におすすめです。



講師 のぶくに もえ  
信國 萌 先生

## 先生の研究

大学の卒業論文から始めて、かれこれ10年以上、一貫してドイツ語の形容詞に興味を持ち、研究を進めてきました。ドイツ語の文の中心はふつう動詞であり、ドイツ語学では従来、動詞の研究が特に盛んでした。しかし、形容詞が動詞に影響を与えていると思える場合があります。例えば、日本語では「この車は速い」といえますが、ドイツ語では「この車は速く、走る」としないと不自然になります。このように、文の中でどの動詞、あるいはどの構文が使われるかを、形容詞が決めていると思われる現象に興味を持っています。特に、形容詞と結びつく動詞が表す事象の種類、いわゆる「アスペクト」と形容詞の関係が研究対象の中心です。



## 学生にインタビュー

○コースに入ったきっかけ  
もともとヨーロッパの文化に興味を持っていて世界史コースと迷っていました。しかし、1回生で受けたドイツ語の授業が楽しく、またガイダンスなどで先輩方のお話を聞いて特定の地域を深く学ぶことができるこの領域の方が自分に合っていると思うようになり、このコースに入ることを決めました。

### ○自身の興味

ナチ統治下の人々の暮らしに興味があります。前から興味はあったのですが、本格的に知りたいなと思ったきっかけは留学中に行った強制収容所の見学でした。改めて特殊な時代だと感じ、その時代に生きる人々の持つ文化に関心を持つようになりました。

### ○コースの雰囲気・特徴

少数数のコースなので先生方や他の学生との距離が近く、アットホームな雰囲気があります。ドイツ語を訊す授業は難しいと思うこともあります。その分上手な訳が作れたときの達成感もひとしおです。また、ハンブルク大学からの留学生と交流する機会があり、様々な刺激を受けることができます。



3回生 くにあやか  
邦 彩花 さん

## 卒論タイトル例

- ・世紀末ウィーンの作家シュニッツラーの『緑のオウム』  
—フランス革命から見るシュニッツラーの社会観—
- ・シュタイナー思想と有機農業
- ・心態詞 ja と doch の考察  
—ドイツ語学習に向けて—

## 教員紹介

**信國 萌 講師** Moe Nobukuni  
現代ドイツ語学、言語学  
事象を項に取るドイツ語形容詞と事象を表す語句の統語論的実現と意味的特性—事象のアスペクト的解釈の対立を手掛かりに—  
(東京外国語大学博士論文、2019)

**高井 絹子 教授** Kinuko Takai  
19世紀末以降のドイツ語圏文学・文化  
『インゲボルク・パッハマンの文学』(鳥影社、2018)

**長谷川 健一 准教授** Kenichi Hasegawa  
18・19世紀のドイツ語圏文化・文学  
共著『ドナウ河—流域の文学と文化—』  
(晃洋書房、2011)

## ドイツ語圏言語文化領域 オススメ入門書

『言葉と歩く日記』(岩波新書、二〇一三年)  
【著者】多和田葉子  
【紹介】多和田葉子さんは、日本語とドイツ語のどちらでも作品を発表している作家で、そのどちらもが高い評価を得て、国内外で数々の文学賞を受賞しています。この本は、日本語とドイツ語、そしてその言語圏の文化をよく知る作者のエッセイ集です。

この本では、普段ドイツで生活する作者の日常や、仕事先の他国での様子を垣間見ること、ドイツ語圏の文化に触れることができます。「作家の頭の中を覗く」という意味では、文学について考えるきっかけを与えてくれる作品でもあります。そして、作者がドイツ語と日本語の違いについて日々感じたことが書かれており、ドイツ語そのものに興味がある人にも、面白い発見があるでしょう。言語はそれを使う人間、文化、社会と密接に結びついています。この本を通じて、ドイツ語に限らず外国語を学ぶ意義と、外国の文化や文学と触れ合うことの重要性を知り、自分自身が何に興味を持っているのかをじっくり考えてほしいです。

